

2 人会話における 同調傾向への関係性の影響

傳研究室 19L1042B 戸枝莉子

1. はじめに

人と人の対話場面において、しばしば相手に話し方や姿勢といったような言語行動、非言語的行動が対話相手に寄っていく現象が起こることがある。このような現象のことを同調傾向と呼ぶ。大坊（1999）によると、同調傾向とは、対話相手とのコミュニケーション行動が連動し、話者交替にかかる時間間隔や、会話の生起時間などのパターンが類似化していくことを指す。同調傾向という現象について、長期的関係性による違いがあるのかどうか研究していく。

2. 分析 1 - 言語情報について -

2.1 目的

異なる長期的関係性において、相槌、交替潜時の言語情報の観点から同調傾向が見られるかどうかを確かめる。また、それぞれの会話において各話者の数値のずれを算出することで、会話において両者の言動に同調傾向が見られるかどうかを明らかにする。

2.2 方法

データ：

『日本語日常会話コーパス』のうち、2人会話、雑談のみ、30分～35分程度の会話の中から、同僚、夫婦、親子、友人、サービス関係、先生と生徒など関係性の異なる会話を17個選定した。

手続き：

相槌回数、交替潜時を調べ、話者ごとにずれがどれほどあるのか調べた。ずれの算出方法は、相槌回数のずれ = $|\text{話者 A の相槌回数} - \text{話者 B の相槌回数}| / (\text{話者 A の相槌回数} + \text{話者 B の相槌回数})$ 、交替潜時のずれは、各会話の各話者の交替

潜時の平均を出し、ずれを算出した。交替潜時のずれ = |話者 A が後続話者の時の交替潜時の平均 - 話者 B が後続話者の時の交替潜時の平均|で求めた。

2.3 結果と考察

相槌回数を見ると親子では同調傾向が見られたが、夫婦、サービス関係間ではあまり見られなかった。また、友人、同僚間では2つの会話を除いて比較的同調傾向が見られた。交替潜時を見ると、親子、同僚で見られた同調傾向が見られなくなった。友人、同僚間では二つを除いて同調傾向が比較の見られやすい会話が多かったため、受容的構えの姿勢が家族間に比べて見られると考えられる。家族間では、親子と夫婦を比べると交替潜時のずれ、相槌回数のずれの大小が正反対のため、別の要因があると考えられる。

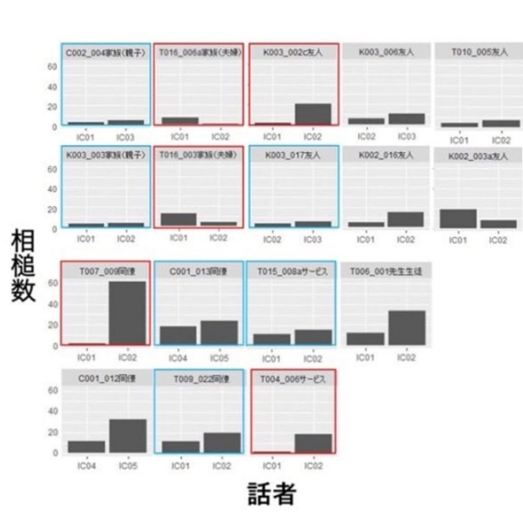


図1 各会話の話者ごとの相槌回数

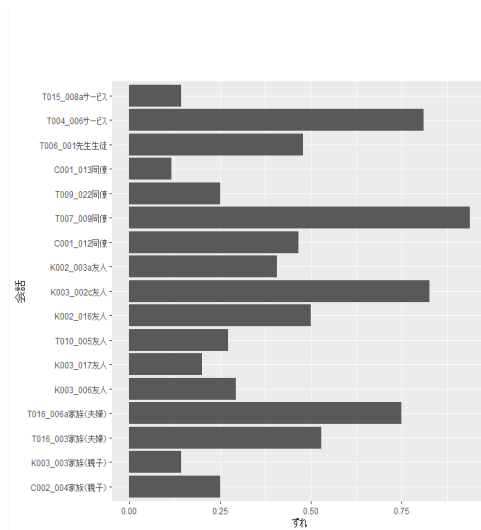


図2 各会話の相槌回数のずれ

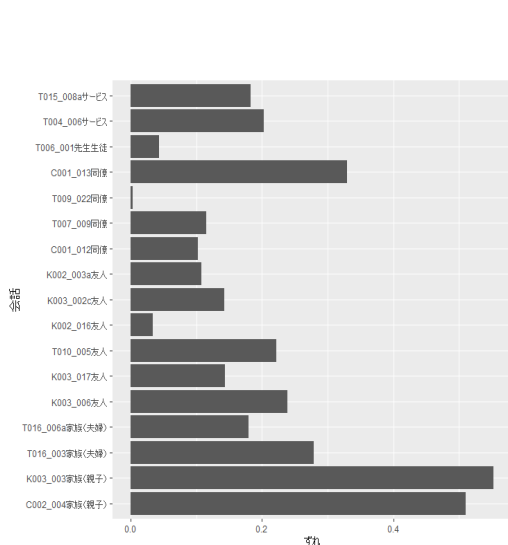
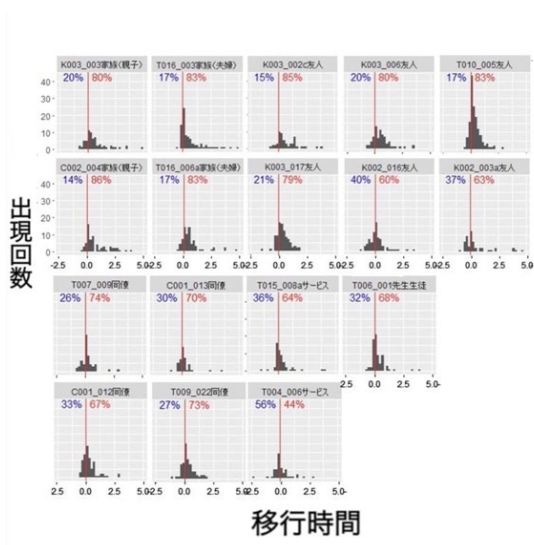


図3 各会話の交替潜時

図4 各会話の話者ごとの交替潜時のずれ

3. 分析2

3.1 目的

家族、友人などの異なる長期的関係性において、うなずき、視線交差の非言語情報の観点から同調傾向が見られるかどうかを確かめることが分析2の目的である。会話している二者の映像データからうなずき、視線交差について注目することで、言語情報で同調傾向が比較的に見られなかった発話データの要因を検討するとともに、非言語情報において長期的関係性における同調傾向が見られるかどうか調べることを目的とする。

3.2 方法

データ：

分析1と同様のデータを使用した。

手続き：

うなずき回数を調べ、話者ごとにずれがどれほどあるのか調べた。また、各話者の視線交差時間を調べた。ずれの算出方法は、 $\text{うなずき回数のずれ} = |\text{話者Aのうなずき回数} - \text{話者Bの相うなずき回数}| / (\text{話者Aのうなずき回数} + \text{話者Bのうなずき回数})$ で算出した。

3.3 結果と考察

うなずきの全体での回数が多いものは同僚、次いで友人であった。また、各会話での話者ごとのうなずき数のずれをみると、比較的ずれが小さく、同調傾向が見られやすい傾向にあった関係性はサービス関係、友人であった。比較的ずれが大きく、同調傾向が見られにくい傾向にあったものは夫婦、同僚であった。視線が合っている時間が多い関係性は親子、同僚、先生生徒であった。視線交差時間とうなずき数のずれを比較してみると、視線交差時間が少ない会話データは同様にうなずきの回数も少ない結果となった。そのため、音声から身体動作へ同調傾向は見られるということの他、視線からうなずきなどの身体動作の順で同調傾向が起りやすくなる傾向にあることが考えられた。会話データごとにずれが大きく、一概に長期的関係性が同調傾向に関係するとは言い難い結果となったものの、夫婦関係においては視線交差時間、うなずき数ともにずれが大きく、同調傾向がどの関係性よりも比較的に見られにくいということが分かった。

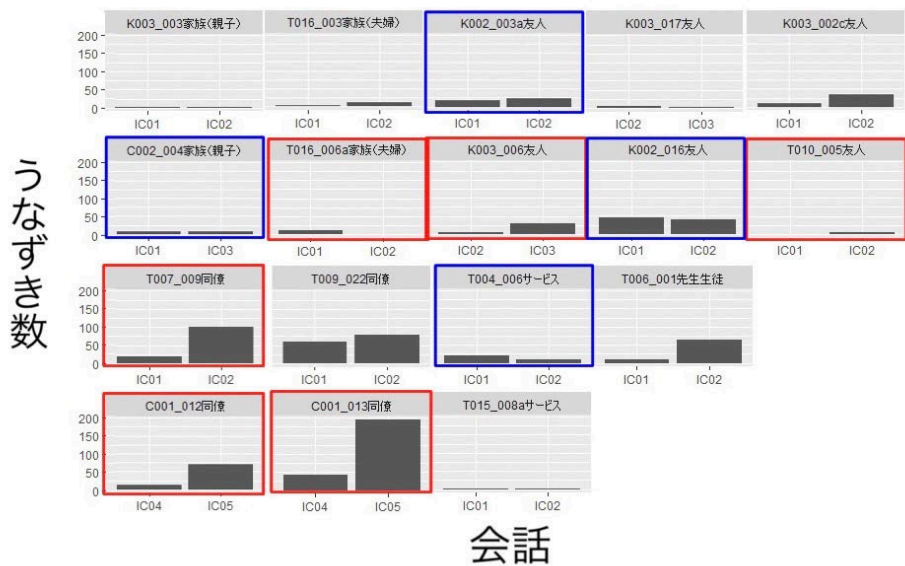


図5 各会話の話者ごとのうなずき数

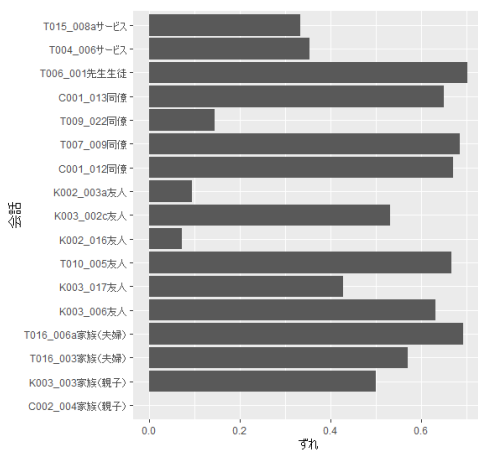


図6 各会話のうなずき数のずれ

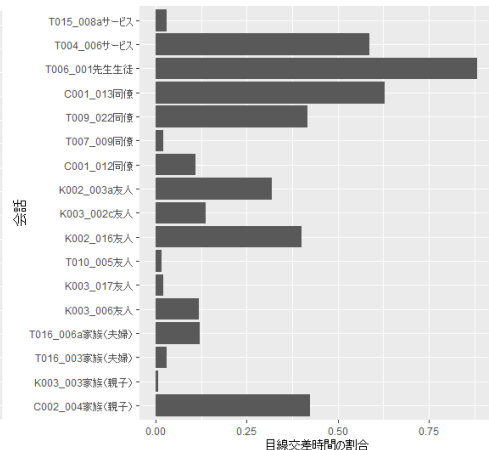


図7 各会話の視線交差時間の割合

4. 総合考察

交替潜時のずれと視線交差の割合は比例していなかったため、同調傾向においてこの2つの関係性は比較的有意ではないと考えられる。また、家族間よりも友人、同僚関係間において同調傾向が見られやすかったため、初対面に近ければ近いほど比較的同調傾向が見られやすい傾向があると考えられるものの、関係性が同調傾向に大きく影響するとは一概に言い難い結果となった。しかしながら、夫婦関係においてのみどの会話でも同調傾向は比較的に見られなかった。今後は、性別や年齢差などの視点で同調傾向に注目すると他の考えを得ることができる可能性がある。